

没後100年のプッチーニ名曲集と生誕200年のブルックナー 第2回

プログラム

今年はヴェルディと並ぶイタリア・オペラ最高の作曲家、プッチーニの没後100年、またベートーヴェン以後、最も重要な交響曲作曲家ブルックナーの生誕200年に当たります。今日は前半にプッチーニのオペラ名曲集、後半にブルックナー特集の第2回をお送りします。ジャコモ・プッチーニは1858年12月22日にイタリアのルッカで生まれました。先祖代々宗教音楽家の家系でしたが、父が5歳の時病死し、一家は音楽家としての成功を彼に託しました。楽才は次第に芽生え、1880年ミラノ音楽院に入学、ポンキエルリやパッチーニに師事しました。1883年卒業作品として作曲した「交響的奇想曲」が好評を得て出版、プッチーニの才能を認めたポンキエルリは詩人フォンターナにオペラ台本の執筆を頼み、プッチーニは処女作「ヴィリ」を作曲しました。好評を得て2作目の「エドガー」を書きますが、これは不成功、しかし第3作の「マノン・レスコー」は1893年初演されると、劇音楽作家としての個性が強く表れたオペラとして大成功を収め、オペラ作家としての地位を確立しました。第4作の「ラ・ボエーム」、第5作の「トスカ」、第6作の「蝶々夫人」はいずれも初演では成功しませんでした、その後世界的に愛されるようになり、今日プッチーニの3大名作として親しまれています。1920年カルロ・ゴッツィの劇をもとにした「トゥーランドット」のオペラ化を決意、翌21年5月から作曲にかかりますが、喉頭がんで病床につき、1924年11月29日、ブリュッセルで生涯を閉じました。最後の大作「トゥーランドット」の未完部分はフランコ・アルファーノによって完成、1926年にトスカニーニの指揮で初演され成功を収め、今日でもよく上演される名作の一つとなっています。アントン・ブルックナーは生涯11曲の交響曲を残しましたが、1863年39歳の時に作曲した短調が最初の交響曲作品で、管弦楽法と楽式の実習として作曲されたため、「習作交響曲」とも呼ばれています。次に作曲されたのが、1865年に着手し1866年に完成した第1番です。番号順では第0番がその前ですが、1869年に完成した短調は第2番とは命名されませんでした。第1番は1868年の初演後、1877年、1884年、1890年に改訂されたウィーン稿があり、自身が「生意気な小娘」と評した活気あふれる佳曲。(中川)

ジャコモ・プッチーニ (1858~1924):

歌劇「トスカ」第2幕「歌に生き、愛に生き」

モンセラート・カバリエ (ソプラノ) / アルベルト・ヴェントーラ 指揮 新日本フィルハーモニー交響楽団

歌劇「トスカ」第3幕「星は光りぬ」

ジュゼッペ・ディ・ステファノ (テノール) / アルベルト・ヴェントーラ 指揮 新日本フィルハーモニー交響楽団
(1975.11.22 神奈川県民ホールでのLive)

歌劇「蝶々夫人 (マダム・バタフライ)」第2幕「ある晴れた日に」

レナータ・テバルディ (ソプラノ)

歌劇「ラ・ボエーム」第1幕の二重唱「愛らしい乙女よ」

フランコ・コレリ (テノール) / レナータ・テバルディ (ソプラノ) / 森 正 指揮 東京フィルハーモニー管弦楽団
(1973.11.21 NHKホールでのLive)

歌劇「ラ・ボエーム」第1幕「冷たい手を」

ルチアーノ・パヴァロッティ (テノール) / カルロス・クライバー 指揮 ウィーン国立歌劇場管弦楽団
(1985.1.24 ウィーン国立歌劇場でのLive)

ペテル・ドヴォルスキ (テノール) / カルロス・クライバー 指揮 ミラノ・スカラ座管弦楽団

歌劇「ラ・ボエーム」第1幕「私の名はミミ」

ミレルラ・フレニ (ソプラノ) / カルロス・クライバー 指揮 ミラノ・スカラ座管弦楽団

歌劇「ラ・ボエーム」第3幕「さようなら、やさしい目覚め～四重唱」

ミレルラ・フレニ (ソプラノ) / ペテル・ドヴォルスキ (テノール)
マルゲリータ・グリエルミ (ソプラノ) / ロレンツォ・サッコマーニ (バリトン)
カルロス・クライバー 指揮 ミラノ・スカラ座管弦楽団
(1981.9.15 東京文化会館大ホールでのLive)

歌劇「ジャンニ・スキッキ」第1幕「私のお父さん」

アグネス・バルツァ (メゾ・ソプラノ) / マルチエッロ・ヴィオッティ 指揮 ミュンヘン放送管弦楽団
(2001.5.13 フリードリヒスハーフェン、ツェッペリン伯爵邸でのLive)

歌劇「トゥーランドット」第3幕「誰も寝てはならぬ」

ルチアーノ・パヴァロッティ (テノール) / クルト・ヘルベルト・アドラー 指揮 ロイヤル・フィルハーモニー管弦楽団
(1982.4.13 ロンドン、ロイヤル・アルバートホールでのLive)

*** 休憩 ***

アントン・ブルックナー (1824~1896):

交響曲第1番 短調 (ウィーン稿)

ミヒャエル・ギーレン 指揮 南西ドイツ放送交響楽団
(2009.1.25 フライブルク・コンツェルトハウスでのLive)